

令和元年6月11日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2018

課題番号：25370918

研究課題名(和文) 港町景観の近世化プロセスに関する歴史地理学研究

研究課題名(英文) The study on the changing processes of the landscape of port towns in the early modern times

研究代表者

山村 亜希 (Yamamura, Aki)

京都大学・人間・環境学研究科・准教授

研究者番号：50335212

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、大河川流域の川湊を基盤とする中世都市が、武家権力による支配・統制や近世初期の経済発展の恩恵を受ける中で、いかにその空間構造を変化させていったのかを考察した。その結果、近世以降の城郭・城下町の整備と港湾機能の高度化と効率化によって、都市における内部空間の分化が進み、城下町と港町とが分離された都市景観が形成されたことを明らかにした。また、16～17世紀の河川流域の急速な環境変化や、武家権力の政治・経済政策、周辺の新田開発、特産品の形成、農村の集落再編や交通路の変更といった地域構造の変化が、港町の景観変化と連動していたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中近世の港町研究は、日本史学や建築史学等の分野で盛んに行われてきた学際的な都市論である。しかし、伝統的に過去の景観復原研究を専門としてきた歴史地理学は、これまで港町研究に、十分には関与してこなかった。本研究は、歴史地理学の景観復原の視点と方法を応用して港町研究に参入する点で、学際研究の進展に貢献する意義を持つ。また、研究代表者はもう一つの研究の軸として城下町研究を行っており、城下町/港町という区分を超えた中近世都市論として、研究を発展させるという点でも学術的意義がある。本研究の成果は日本各地の港町において、地域の魅力や価値を市民とともに再発見することにつながり、その点で社会的意義を持つ。

研究成果の概要(英文)：This research has focused on the medieval cities whose ports are located large rivers, and has examined how their spatial structures changed in the early modern times as they gradually came under the rule of warrior feudal lords and reaped benefits from the economic development. It turns out that, with the lords' castles and their towns arranged and the ports attaining more sophisticated functions and fulfilling them efficiently, they became divided into areas of distinct roles, the castle town area and the port town area were kept separate within the same cities. The research also reveals that in the 16th and 17th century, the landscape transformation was correlated with such factors as the rapid change of environment along the rivers, the political and economic policies of warrior lords, the invention of specialty products, and the development of new rice fields as well as the reorganization of farming villages and the alteration of traffic routes in the surroundings of the cities.

研究分野：歴史地理学

キーワード：歴史地理学 景観復原 港町 川湊 城下町 近世化 空間構造 景観史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで、日本中世都市の空間構造の特質を歴史地理学の視角から考察し、その成果を単著『中世都市の空間構造』(吉川弘文館、2009)に総括した。そこでは、中世都市の景観は、地域固有の政治・社会・経済・宗教・文化的文脈と、既存の集落・耕地形態、自然地形、領主権力と都市の空間認識に強く規定され、多様で動的であったことを実証した。これをふまえて、中近世移行期(15~17世紀)に焦点を移し、地域固有の動的な中世都市の景観が、大名権力の理念・政策を強く反映し、求心的で均質性を特徴とする近世都市の景観へと転換するプロセスと要因の解明(中近世移行期の都市景観史)を、研究目標としている。

中近世移行期都市の代表例は城下町であるが、本研究では、主に西欧をフィールドに国際的な景観比較論が先行し(陣内秀信他編著『水辺から都市を読む』法政大学出版局、2002、深沢克巳『海港と文明』山川出版社、2002など)、日本でも文献史学、建築史学、考古学による学際研究(市村高男編『中世西日本の流通と交通』高志書院、2004、宮本雅明『都市空間の近世史研究』中央公論美術出版、2005など)が盛んな港町を対象とする。伝統的に過去の景観復原研究を専門としてきた歴史地理学は、これまで、学際的な都市論として興隆する港町研究に、積極的に関与してきたとは言い難い。そこで研究代表者は、平成22年度~25年度若手研究(B)「中近世移行期日本における港町の景観研究の基盤構築」(以下、若手研究と略す)において、歴史地理学の視点から、当該期港町の実証的な景観復原方法の検討と、客観的な景観比較の基礎となる個別港町の先行研究に取り組んできた。この成果として、4点の知見と課題を得た。

(1) 研究代表者が中世国府や城下町研究で培った景観復原の方法(史資料の網羅的収集と、信憑性の程度を区別する史料批判及び地図化)に、微地形復原を追加することが、当該期港町の復原方法として最適であることを、駿河清水・江尻の事例から実証した。

(2) 当該期中で最も急で著しい港町の景観変化は、全国的に、大名権力の領国経営の一環に港湾支配が組み込まれた近世初期(17世紀)におこる。この港町の近世化は、全国的に見ると、城下町の一部として包摂される「城下町化」と、藩の主要港湾として整備され発展を遂げる「外港化」の2つに大別される。それぞれ特徴的な景観変遷プロセスを辿ったことが予想されるが、これは個別港町の実証的な景観復原の蓄積により検証する必要がある。

(3) 港町景観の近世化とは、その地域に存在した多種多様な中小中世都市(城下町・港町・市町・寺内町など)の中から、大名権力が特定の城下町や港町のみを選択し、そこに都市機能を集中させることと軌を一にする現象であった。同時期は、都市周辺で新田開発も盛んに行われており、換言すれば、港町の近世化とは地域構造の再編という地理現象の一環でもある。その側面を無視して、当該期港町における景観変遷プロセスのメカニズムを説明することはできないだろう。

(4) 港町の近世化は、詳細にそのプロセスとメカニズムを検討するならば、地域差が大きいことが予測される。この相違に着目することで、固定的で画一的なプランが想定されてきた、従来の近世港町論から脱却し、動的で実態に即した港町景観史を目指すことができる。また、西欧港町においても、日本と同じく港町景観の近世化の大きな地域差を見出せることから、「近世化」という新しい指標による、港町景観の国際比較が可能になるだろう。

以上のような研究代表者の研究関心と港町研究の現状を背景として、研究を開始した。

2. 研究の目的

研究代表者は、中近世移行期(16~17世紀)日本における都市景観史の解明を研究目標としており、本研究はその一環として、当該期を代表する都市の一つである港町を対象として、歴

史地理学の視角に基づき、主要港町景観の近世化プロセスの復原と、中世都市システムの近世的再編の考察を通じて、日本中世港町の近世化の実態を解明する。また、分析対象地域の研究成果を日本及び西欧各地の個別港町の先行研究と比較しながら、その特質を考察する。

3．研究の方法

本研究では、具体的な分析対象地として、中近世に大規模河川の中流・下流部に川湊が発達した、尾張犬山（木曾川）と美濃岐阜（長良川）と阿波勝瑞（吉野川）、出羽酒田（最上川）を設定した。これらの川湊に対しては、戦国期の大名権力が接近し、隣接した場所に城郭と城下町を構える点が共通する。川湊とその周辺の町場は、城郭・城下町の形成及び再編の影響を受けて、その景観を変化させた。このような川湊を持つ城下町の景観変化を解明するには、旧地形を地図化した上に、寺社や町、市、有力町人の居所、城、武家屋敷、交通路等の景観構成要素を、絵図や文書史料に即して時期別に位置比定する必要がある。このようにして導き出した景観復原図を、周辺部の地域構造の変化と併せて解釈し、港町景観の近世化の一般性と地域性を論じる。景観復原図の解釈においては、国内の他地域における中世港町の近世化に関する先行研究や、西欧中世港町の近世化事例も参考になる。よって、個別都市の景観復原研究と平行して、国内外の事例の収集にも努める。

4．研究成果

第一に、長良川扇状地の扇頂部に位置する川湊で、戦国期以降、齋藤氏と織田信長の本拠として大きく発展した岐阜を事例として、景観復原研究を行った。齋藤氏と織田信長は、それ以前より宿であった井口を城下町化し改修するが、その建設過程において川湊は城下町の外に置かれ、城下町と港町が明確に分離する空間構造になったことを、復原図の作成を通じて明らかにした（雑誌論文・図書・学会発表・）。

第二に、尾張犬山を対象として、戦国期から近世前期にかけて城下町が発展したプロセスを地図化した。木曾山地に源流を持つ木曾川に面し、その扇状地の扇頂に位置する尾張犬山は、豊臣秀吉以降、木曾川の材木流送の要とされた。犬山には城郭が整備され、一国一城令以降も、尾張藩における名古屋以外唯一の城下町として維持された。このような犬山における中世以来の川湊と近世初期に大規模に整備された城郭・城下町との関連と、そこに形成された空間構造を実証的に明らかにした。秀吉期に台地上に総構で囲まれた城下町が形成された一方で、台地崖下の中世川湊は港湾管理機能を強化しながらも、同じ場所に営まれた。城下町の建設と川湊の機能強化は、尾張における城郭の取捨選択と、木曾川の川湊の淘汰・移転とも連動した現象であった。その結果、近世犬山城下町は台地の町と崖下の川湊が総構で分離されるものの、一体の都市として機能した。このような城下町と港町の景観の分離と機能の一体化は、美濃岐阜でも確認された現象である。これは、16世紀末から17世紀初頭の木材バブルの時代に、広大な山地を後背地を持つ東海地方の川湊（「山の港」）に特徴的にみられる景観ではないかとする仮説を立てた（雑誌論文）。

以上の岐阜及び犬山の景観復原研究の成果をふまえて、後背地に中央山地を持つ東海地方に特徴的な木材湊の景観と、それを包摂する城下町の形成プロセスについて比較考察を行った。岐阜においては、城下町の木材問屋業と湊町の木材中継業とが16世紀後期の信長期に機能分離し、城下町と隣接しながらも、総構によって明確に区分される川湊の町並が出現した。犬山においても、城下町と川湊が総構で分離された点は岐阜と共通するが、城下町と川湊とで機能分化することなく、むしろ川湊側に港湾機能は一元化された。犬山の場合は、木曾山地という豊富な材木供出地を上流に持ち、その筏継立て場として、木材の独占管理が岐阜以上に重視され

たため、商業目的の問屋業は発達せず、中継港としての管理機能に特化することとなった。つまり、岐阜は商業交易港として、犬山は中継管理港として、中近世移行期以降、別の道を迎えることになる。しかし、いずれの場合も、城下町に包摂されたとき、河岸や水上からのビスタを強く意識して、ランドマークとしての天守が城郭に築造された。また、城下町のメインストリート（大手道）が川湊に向かうことはなく、城下町プランの中核に川湊が位置づけられることもなかった。このように、東海の大規模河川の谷口に位置する城下町においては、城下町と川湊という2つの双子都市が隣接し、その間を総構が隔てる点に景観的特徴を見出すことができる。

以上の成果は、第16回国際歴史地理学会にて、同じ16・17世紀における石見銀山の港（学会発表）や出羽酒田湊と比較しながら、英語で口頭発表を行った（学会発表）。ここでは、木材の港である尾張犬山と美濃岐阜の事例を核としながら、事例として収集した銀の搬出港である石見温泉津や近世米経済の発達と共に大規模化した米の港の出羽酒田と比較することで、中近世移行期の港町景観を規定する要因分析を試みた。国際学会での口頭発表で、一定の研究者の関心と議論を集めることができたように思う。

第三に、吉野川下流域の戦国城下町である阿波勝瑞においても景観復原研究を深化させた。デルタに形成された勝瑞は、当初より城下町の内部に複数の水路と港を包摂しており、16世紀末に徳島に城下町が移転しても、このような「内港型」の都市構造は継承された。以上のことから、木曾川と吉野川とでは、港町は異なる近世化プロセスを経験したことが推定される（雑誌論文、学会発表、図書）。

第四に、出羽酒田を事例として、周辺地域の構造変化と港町景観の形成を関連づけながら、景観復原研究を行った。酒田は、日本海における北前船の寄港地として著しい発展を遂げた近世港町である。その前身となった中世集落とは異なる場所に移転して、その後に発達した点から、近世の「ニュータウン」とも位置づけられる。この酒田の港町景観の形成プロセスを、後背地である最上川流域や庄内平野における地域構造の変化と関連付けて検討した。その結果は、以下の4点に集約される。16世紀から17世紀にかけての最上川河口部一帯では、土砂堆積が進み、地形環境が大きく変わりつつあった。その変化に対応でき、かつ内陸交通路とのアクセスを重視した場所に、新たに酒田は移転したと考えられる。移転先に、街道の結節点に近く、先行する城郭や町場との政治・経済的摩擦が比較的小さい場所を選んだため、酒田はそれ以前の集落構造や地形といった「しがらみ」とらわれることなく、他の港町以上に人工的・計画的な街路形態となった。16世紀末以降の庄内平野における画期的な用水システムの導入と水田一円化の進展、新田村落の形成といった地域構造の変化が、酒田の都市形成の大きな要因であった。これに加えて、最上川舟運のインフラ整備と内陸水運の活性化という、もう一つ大きなスケールでの地域構造の変化が、酒田に都市発展をもたらした。このように、地域論的視点から酒田の港町を論じる実証研究により、都市景観の形成・発展は、村落や周辺の景観変化と連動するものであり、中近世移行期における地域構造変化の一部を担ったことを明らかにしえた（図書）。

第五に、以上の国内の対象地における景観復原研究を、国際比較研究への発展を視野に入れて解釈するために、主にフランスにおいて、中近世港町の資料収集と現地踏査を行った。フランスは、強大な近世中央集権体制の確立によって、川湊・海港共に急激な近世化を経験したという、歴史的な脈が日本の事例と類似することから選定した。サン・マロ、ナント、ディナンなどのブルターニュ地方の港町調査においては、地形の制約を受けて、中世的な都市構造をよく残しつつ、港湾部の肥大化や外周の強化を行って、港と都市の景観上の分離を遂げたことが推定された。近世化の結果としての景観は異なるものの、港と都市の分離という現象は日本と

共通することを指摘しうる。フランス南西部（アキテーヌ、ミディ地方）の海港・川湊都市であるポルドー、パイヨンヌ、トゥールーズの現地調査からは、これらがいずれも河口内港であり、港湾・都市集落の分節化や視覚的效果を狙った施設配置・建造物の建築といった現象を、「近世化」の実態として指摘しうるということが分かった。この点は、岐阜や犬山と共通する近世化の要素であり、今後の比較研究にも大きな参考となる。また、フランス中部のアルザス・ブルゴーニュ地方においても、現地調査を実施した。この地方は丘陵斜面におけるブドウの栽培が盛んで、中世以来、ワインの世界的産地として発達した。その積出港・中継点として発達したのが、ディジョンやストラスブル、コルマル、マコン、オーセールといった川湊を持つ都市である。これらの中世都市の形態が近世以降、いかに変化するかを地図上で考察するため、絵図資料・地形図類を博物館等で収集し、実際にその立地を現地踏査において確認した。

上記の比較調査を通じて、中世港町の近世化プロセスに関して、以下のような知見を得た。一般的に港町とは海港を指すが、内陸における河川舟運が発達した中近世の日本やフランスにおいては、川湊を持つ都市（城下町・在郷町）も同様に景観を大きく変化させた。その変化の構造的要因としては、権力による軍事・政治編成の他に、後背地における特産物（木材・米・ワインなど）の成立による経済構造の変化が挙げられる。中世都市においては港湾と町は一体化していたが、近世以降、港湾機能の高度化と効率化によって、港町における内部空間の分化が進んだ。これらの変化は、日本では16世紀末から17世紀前期にかけて生じた。西廻り航路の開設や北前船の到来以前に、既に港町の都市構造は変化していたと考えられる。

以上のように、本研究においては、大河川流域における川湊を基盤とした都市が、武家権力による城下町化や近世初期のバブル経済の恩恵を受ける中で、いかに景観を変化させていったのかを明らかにした。これらの成果より、中近世移行期の環境変化のみならず、地域構造の変化、さらに武家権力の経済政策・軍事支配が、港町の都市景観に大きな影響を与えたことを明らかにした。このような研究を行う中で、不足している観点は、農村における集落景観や、地域の開発・開拓景観、幹線交通路に伴う集落再編と、他の港町との関係である。出羽酒田の都市発展を、庄内平野や最上川流域といった広域スケールの地域構造変化と関連させて、その形成プロセスを解明したが、このような視点・方法の研究を蓄積することが必要であろう。

また、城下町と港町を、武家の町（政治都市）と町人の町（経済都市）のように、極端に二分する視点の危うさも、本研究から指摘できる。実際には、城下町化を経験することで、飛躍的に都市規模が拡大し整備が進む港町や、傍らに寄り添うように城下町が接する港町も多い。港町と城下町のカテゴリーは概念として便利であるが、都市景観の形成プロセスとメカニズムを解く上では、より実態に即した分析が必要となることが分かった。

これらの点をふまえて港町研究を深化させ、研究代表者のもう一つの軸である城下町研究も平行して進める中で、両者を包括する中近世移行期都市論として総括することが今後の課題である。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

山村 亜希、阿波勝瑞 城下町の立地と景観、中世都市研究、査読無、18巻、2013、101-115頁

山村 亜希、岐阜城下町の空間構造と城下町、愛知県立大学日本文化学部（歴史文化学科）論集、査読無、5巻、2014、1-28頁

Yamamura, Aki 他、‘Historical geography as an international discipline 1975-2015 : responses, *The Geographical Journal* 182-3, 査読有, 2016, pp.284-288

山村 亜希、犬山城下町の空間構造とその形成過程、地域と環境、査読無、14巻、2016、1-23頁

〔学会発表〕(計8件)

山村 亜希、中近世の城・町・港と吉野川 勝瑞から徳島へ、人文地理学会第279回例会(特別例会)、2013年6月8日、徳島大学

山村 亜希、中世都市研究への歴史地理学の貢献と可能性 戦国城下町論・再考を通じて、人文地理学会第133回歴史地理部会、2013年11月9日、大阪市立大学

山村 亜希、戦国城下町と川湊 岐阜城下町論・再考を通じて、名古屋歴史科学研究会1月例会、2014年1月24日、名古屋大学

山村 亜希、中世石見益田の景観、中世都市研究会、2014年9月6日、益田市立市民学習センター

Yamamura, Aki, 'Comments from the Viewpoint of *Historical Geography*' Plenary Session on The 16th International Conference of Historical Geographers, 5th July 2015, The Royal Geographical Society, London, UK

Yamamura, Aki, 'Silver, Timber and Rice: Regional Industries and the Modernization of Port-town Landscapes in Japan' The 16th International Conference of Historical Geographers, 10th July 2015, The Royal Geographical Society, London, UK

Yamamura, Aki, 'The Transforming Processes of Kyoto, the Millennium Capital of Japan -Studying the Historical Localities of Kyoto' Sino-Japanese-Korean Symposium on Theory and Practice of Local Studies, 20th August 2016, Beijing Union University, Beijing, China

Yamamura, Aki, 'The Transforming Processes of Kyoto, the Millennium Capital of Japan' The 33th International Geographical Congress, 22th August 2016, China National Convention Center, Beijing, China

〔図書〕(計5件)

山村 亜希 他、ミネルヴァ書房、人文地理学への招待、2015、183-201頁(「現実世界の歴史地理」)

山村 亜希 他、清文堂出版、中世日本海の流通と港町、2015、257-286頁(「室町・戦国期における港町の景観と微地形—北陸の港町を事例として—」)

山村 亜希 他、吉川弘文館、古代・中世の都市空間と社会、2016、217-248頁(「戦国城下町の景観と「地理」 井口・岐阜城下町を事例として」)

山村 亜希 他、思文閣出版、守護所・戦国城下町の構造と社会、2017、126-146頁(「室町・戦国期における勝瑞の立地と形態」)

山村 亜希 他、吉川弘文館、歴史地理学と景観史、2018、130-150頁(「中近世移行期における地域構造の変化と港町の景観 出羽酒田を事例として」)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究分担者

なし

(2) 研究協力者

なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。